

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 57

2015年 8月



プロジェクト最終日、全員でゆかたを着て大喜び。これからフェアウェルパーティーへ。

当法人の青少年国際交流事業のスタートは2005年でした。イスラエル、パレスチナ、日本の高校生は広島、長崎の原爆記念式典で祈りを捧げました。2007年の長崎式典で紛争当事国の若者が並んで慰霊碑に献花する姿は、まさに「平和への希望」の象徴でした。当時のメンバー、パレスチナ人のヤクーブ・ガザウィは、今や私たちを支えるプロジェクト責任者の一人として活躍しています。イスラエル人のペレグ・バル・オンも今年兵役を終えリーダーとして再来日。彼は軍隊生活でも日本で学んだ平和の大切さやパレスチナの友人が忘れられず、「一日も早い平和の実現」を願っていたと語ります。

私たちのささやかな活動がきっかけとなり、若者たちの「平和を求める」行動が着実に成長しているのは嬉しいかぎりです。

これも皆様のご支援のおかげと、心から感謝しております。引き続きよろしく願いいたします。

井上 弘子 スタッフ一同



認定NPO法人
聖地のこどもを支える会

Email ispalejpn@gmail.com

TEL/FAX 03-6908-6571

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502

当法人への支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

ホームページからクレジット決済でもご支援いただけます <http://seichi-no-kodomo.org>



7月27日東京駅集合、これから新幹線で東北、被災地へ。

大槌町でのボランティア活動 (7月27日～8月3日)

7月27日早朝、9名のイスラエル・パレスチナの若者が成田空港に到着し、長旅にもかかわらず、その日のうちに岩手県大槌町のカリタス大槌ベース入りした。

翌日、視察とビデオにより、地震と津波の被害を学んだ。若者たちは被害の大きさに驚き、人々の苦しみの深さに涙した。そして復興が遅々として進まないために、今も困難の中で生活している人々を目の当たりにした。

29日からボランティア活動開始。今回もカリタス大槌ベースのおかげで、様々な現地の団体、個人の支援活動に参加させていただいた。

子ども夢ハウスおおつち

山口県の社会福祉法人が運営する子どもたちのための家。朝から夕方まで自由に来て、宿題や勉強をしたり、友達と遊んだりできる場所だ。多くの子どもが津波で親族や家を失くし、仮設住宅に暮らしている。また家庭の事情やいじめ・不登校などで傷ついている子どもも。一つの班はここに3日間通い、子どもたちの見守りをしたり、一緒に遊んだりした。慣れない《ガイジン》に最初はこわごわ接した子どもたちも、ゲームやサッカーをしているうちにすぐ打ち解けて、みんなが明るい笑い声。仲良くなって、最終日は名残り惜しいお別れとなった。

荒れ果てた畑の手入れ

元消防団員のSさんの依頼により、荒れた畑の草取りと収穫もした。Sさんは現在、被災者の中で、アルコール依存症や引きこもりで苦しんでいる一人暮らしのお年寄りのために、畑仕事やお茶会、手作り品を売るアンテナショップなどを交流の場として提供している団体の前会長だ。昼休みにご自身の被災体験も話してくださった。親戚や知人も含め沢山の人が目の前で流されていくのを見ても何もできなかった悔しさと無力感……。ほんとうに胸に響く話し方だった。そして言われた。「あなたたちも紛争で苦しんでいるのは知っているが、その苦しみは人間同士が作っているのだから、話し合えば何とか解決できるのではないか……」

収穫したばかりのジャガイモ、キュウリ、トマトなどをいただいたが、そのおいしさは忘れられない。

仮設住宅訪問

大槌町第20仮設の訪問は、今年で3回目になる。何人か懐かしいお顔も見え、再会を喜んだ。3回目となる長野県善光寺玄證院の福島貴和師の訪問も、お年寄りたちにはとても喜ばれた。作りたてのイスラエル・パレスチナ料理を提供し、喜んでいただいた。

コラボスクール

あるNPO主催の放課後学校で、高校生・中学生たちと交流。英語による大槌町ガイドツアーをして



おおつちありがとうロックフェスティバルで「中村子ども太鼓」の子どもたちと。

もらい、ワークショップでコミュニケーション。最後はスイカ割りで、楽しい時間を過ごした。初めて外国人と英会話ができた中学生たちはとても嬉しそうで、英語の勉強を「もっとがんばる!」とのこと。よいきっかけと刺激になったようだ。

おおつちありがとうロックフェスティバル

地元の実行委員会主催のフェスティバルでは、「中村子ども太鼓」に参加させていただいた。3カ国の若者が、法被（はっぴ）などの伝統衣装で、女性や子どもたちともに和太鼓と踊りに加わり、大きな注目を集めた。また、テントを貸してもらい、会場内にイスラエル・パレスチナの文化紹介と交流の場を設け、「イスラエル・パレスチナ直送」のドライブフルーツやお土産販売も行った。

会場設営は炎天下、撤収は大雨の中。汗と泥にまみれて一生懸命手伝い、たいへん喜ばれた。

共同生活

畳の部屋で布団を敷きつめての雑魚寝初体験に最初は驚いたが、慣れてくると快適に。食事、掃除、洗濯など当番を作って協力した。お互いの疲れや体調をいたわり合い、協力し合う姿には、国籍や宗教の違いは感じられなかった。

8月13日、すべてのボランティア活動を終えて、夜行バスで東京へ。翌日は待ちに待ったフリータイ

ム。スカイツリーや浅草界隈で観光した。

JICA東京国際センターでのセミナー (8月5日～9日)

大槌町での活動を振り返り、紛争体験の分かち合い、意見が対立する時の解決方法を学ぶ「国連ゲーム」など、その他様々な活動や対話を通じて、「平和の架け橋」を築くよう、みんなで努力した。

国籍も宗教も年齢も異なるメンバーで、いつもながら些細なトラブルは起きるものだ。被災地の奉仕活動では、結束はそれほど難しくない。けれども、東京では互いに正面から向き合うことになるので、性格や考え方の違いが表面化する。紆余曲折のち、それでも彼らなりの「平和宣言」ができあがり、全員が署名した。(11月に発表する「プロジェクト報告書」に掲載予定です)

わずか2週間のプロジェクトは、「平和の架け橋」の土台を築くためのスタートラインにすぎない。ここで、若者たちは対立や衝突を通して自分自身を見つめ、相手を理解しようと努めることで、平和を築くには、どれほど和解と相互理解、感謝と尊敬が大切かを学んだ。「どんなに難しくても《平和共存》は可能だ」という体験が、これからそれぞれの人生で、「平和のために働く」指針になってくれれば幸いである。

「平和の架け橋プロジェクト2015」支援イベント

出川展恒氏講演会『混迷する中東情勢を読む』



夏のプロジェクト支援の一環として6月28日、東京都武蔵野市のカトリック吉祥寺教会で、NHK解説委員の出川展恒（のぶひさ）氏による講演がありました。出川氏はテヘラン、エルサレム、カイロの各支局長を歴任、2006年から中東問題専門の解説委員を務めています。

講演は ▼対IS作戦の行方 ▼イラン核協議の行方 ▼イスラエル・パレスチナ紛争の行方 を三つのテーマとして。以下に要旨をお伝えします。

▼対IS作戦の行方

米国は、イラクとシリアに拠点を持つ過激派組織IS（イスラム国）を壊滅させようと動き始めましたが、その作戦は一進一退です。

ISは昨年（2014年）6月、シリアの一部とイラク北西部を制圧すると29日に国家を宣言しました。これに対し米国は8月、ISの拠点への空爆を開始し、ティクリットという主要都市を奪い返しましたが、逆に首都バグダッドに近い都市ラマディを奪われるなど苦戦を強いられています。

苦戦の一因はイラク軍の士気の低さで、それはフ



講演する NHK 解説委員出川展恒氏。

セイン体制崩壊後の国づくりの失敗からくるものです。宗派・民族の対立を抱えるイラクでは、人口の20%がアラブ人のイスラム教スンニ派、60%がアラブ人シーア派、20%がクルド人（大半がスンニ派）。フセイン独裁政権時代は鉄の輪でまとめられていましたが、それがとれた今、選挙では多数派のシーア派が実権を握ることになり、結果として国づくりから排除されたスンニ派に不満が募りました。

この宗派対立が、軍事作戦にも影を落とします。対IS作戦では政府軍の強化が必要ですが、それには時間がかかります。正規軍でないシーア派民兵組織には力があり、ティクリット奪回に貢献しました。ところがスンニ派住民には反発されるので、民兵組織を活用するにも宗派対立の解消が必要なのです。

一方、国外からの戦闘員の参加、資金や武器の流入も大きな問題で、これを断つ国際包囲網が必要です。流入する戦闘員は2万人ともいわれ、多くは中東諸国からです。失業などで将来に希望が持てず、ネットの宣伝に乗せられて来る若者が多いようです。また、欧米国籍でも中東出身者のルーツを持ち、差別的待遇に不満を持ってISに走る人々もいます。

▼イラン核協議の行方

イランが進めている核開発を抑えさせるのを目的として、欧米が中心になってイランに経済制裁を加えてきましたが、核兵器保有につながる生産施設の設計変更などを条件に制裁を解除することを話しあう協議が、最終合意に近づいています（講演後の7月14日に合意）。

核兵器用にはウラン235の濃度を90%以上にする必要があります。イランは20%まで上げる能力を持ってそうですが、3.5%程度の濃縮能力なら容認で

きるというのが欧米の考えです。イランは遠心分離機の削減など核開発を今後10年にわたって大幅に制限し、見返りとして原油輸出規制や金融取引制限などの経済制裁解除を獲得することになります。

合意には解釈の違いなど対立点もありますが、米国内にも、イスラエルのネタニヤフ首相を支持する共和党が反対するなど対立があります。ネタニヤフ政権は、イランは核兵器を開発するに決まっているとし、武力攻撃も辞さない姿勢を公にしています。

▼イスラエル・パレスチナ紛争の行方

昨年7月8日から8月26日まで続いたガザ戦争では、パレスチナ人2,140人が犠牲になり、うち500人は子どもでした。イスラエル側の死者は兵士64人、一般人6人です。ガザを支配しているイスラム原理主義組織ハマスが、イスラエル軍の攻撃に対し住民を盾にしている面もありますが、イスラエル側も住宅地を爆撃して一般市民の犠牲を大きくしました。停戦後も建設資材の搬入が止められており、復興が進みません。世界銀行によるとガザの失業率は43%、若者に限ると60%にものぼります。貧困レベルの世帯は40%で、93年からガザの経済発展はなく、一方で人口は2.3倍です。

3月に実施されたイスラエル総選挙の結果、国会の120議席のうち30議席で第1党になった右派政党リクードを軸に連立政権ができました。与党で和平に積極的な政党はありません。リクード党首で首相を続けることになったネタニヤフ氏は「パレスチナ国家はつくらせない」という発言もしています。

和平に希望を持ってない状況の中でパレスチナ側は「国際化戦略」をとるようになっていきます。国際組織に加盟して国家として認められようという狙いです。2011年に国連加盟を目指した時は、米国の拒否権で果たせなかったものの、翌12年にはオプザーバーとしての加盟を認められました。パレスチナ解放機構（PLO）という組織から国家へと資格が格上げされての参加です。国家として正式に認めようという動きが欧州を中心に広がり、現在では130カ国以上が国として承認しています。

ただし、領土が確保されていない名ばかりの国家でしかないのが実情で、（自治区域であるべき）ヨル

ダン川西岸へのユダヤ人入植地拡大が、和平交渉をますます遠のかせています。和解への機会が望まれるものの、両民族が対等な立場で顔を合わせることは

はまれです。「聖地のこどもを支える会」の交流プロジェクトは、そのまれな機会をつくる実に貴重な実践であり、敬意を表します。（村上宏一）

「平和の架け橋プロジェクト2015」支援イベント

イスラエル・パレスチナ・日本

友好の夕べ

(音楽とビュッフェのつどい)

7月11日、『イスラエル・パレスチナ・日本 友好の夕べ』が東京・四谷の聖パウロ修道会若葉修道院の地下ホールにて開催された。参加者は100名以上。第1部では沖縄県在住のゴスペルシンガー、上原令子さんのゴスペルコンサートを、また第2部では、恒例となった東京・神田の『アルミーナ』のアラブ料理のビュッフェを楽しんでいただいた。

上原さんは、ご自身の生き立ちや体験を交えて語り、「すべてのいのちに生きる価値がある」というメッセージの込めた歌を聴かせてくださった。「私には世界の平和を作ることはできません。でも、ひとり一人の心の平和を作ることはできます。この世には、誰ひとりとして、愛されずに存在している人はいません。自分は愛されている、大切に思われていることを信じられれば、私たちの心に平和が来ます。」と話された。いつも感謝の気持ちを忘れずにいたいとおっしゃる上原さんの歌は、心に染み入り、涙があふれるほどの感動を与えてくれた。

アラブ料理『アルミーナ』のメニューは、ファトゥーシャ(チーズ入りサラダ)、ひよこ豆を使ったファラフェルやフームス、ピタパン、鶏肉や野菜のクスクス、マラビーヤ(デザート)など。日本では滅多に味わうことのできないお食事を堪能した。参加者の中には、昨年もこの催しにいられて『アルミーナ』のお料理がとても気に入って、その後神田のお店の方にも食べに行かれたという方もいらっしゃった。

心が洗われるような素晴らしい歌声と、美味しいアラブ料理を存分に楽しみ、プロジェクトの成功を皆で願いあったイベントだった。(中山タリ亜)

当日寄せられた感想をいくつかご紹介します。

●上原令子さんのゴスペルソングと、歌の合間に話されるご自身が体験されたこと、感じておられることは、毎回経験することですが、私の心にズシンと響きます。



上原令子さんとピアノ伴奏の由美子さん。素晴らしい歌とトークで楽しいひととき。

上原令子さんが背負ってこられた苦しみの心の叫びが、聴く者の苦しみと重なるからでしょう。また伴奏者バック・由美子さんとの息もピッタリですね。アルミーナのビュッフェも楽しみの一つですが、友人と話をしている間にデザートはなくなっていました、残念!

井上さんとスタッフの皆さまの平和に対する熱い思いをこれからも微力ながら応援させていただきます。

●上原さん、とてもとてもすてきでした。歌を聴いてイスラエルを思い出し、涙がとまりませんでした。

●イスラエル・パレスチナ・日本の若者たちが共に平和を築くために一歩を踏み出している姿に感動しました。上原さんのステージは、エルサレムは私たちの心の故郷だと本当に感じました。神の愛を知って、新たに歩み始める人の姿は、悲しみや苦しみを越えて喜びにあふれていました。哀れみ深い神の愛を心底感じました。ありがとうございました。

●著名な人でなくても良いので、三か国のパネルディスカッションがあると良いと思います。

●親友に誘われて、この夕べに参加させていただきました。こんな素晴らしい働きがあることに感動しました。中東情勢には聖書を学んで以来、とても関心があるのですが、困難さを思うだけで、ただ平和を祈るのみでした。幼いうちに、若いうちに、平和について教えられなければなりません。聖地の子どもたちが学べる環境を支援し、「平和の架け橋」となって、誤解や憎しみから解放され、互いに愛し合い、分かり合う輪が広がっていくのは素晴らしいことです。この働きのために、長年労わられておられる方々に感謝いたします。

言論の自由を脅かす「時代の空気」

村上 宏一（当法人理事・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

安全保障関連法案が衆議院を通過しました。「オリーブの木」55号の論考『人質殺害で問われる日本のあり方』で筆者は「テロへの対処を含め国際問題に日本はどう取り組むべきか、今は選択の岐路にあるのではないか」という趣旨のことを書きましたが、安保法案を提出した安倍政権の選択は端的に言えば、紛争防止のために海外で武力行使ができる、つまり戦争ができる国にしたい、ということです。この「平和のために武力で貢献」という考えの底流にあるのは、紛争防止などの際に国際社会から「自分たちは血を流さずに黙って見ていていいのか」と思われているのではないか、という負い目の論理です。米国に「お前たちも共に苦労しろ」と言われて従おうとしている、といったところです。

しかし、国際社会において日本は「自分は血を流さずに守られている」と非難されることより、戦後一貫して「他国に侵攻して住民に血を流させたことがない」ことへの評価の方が大きいのではないのでしょうか。「世界平和のために日本も犠牲を払う用意はある」という姿勢を見せることの意味を否定はしなくとも、戦後「他国を侵したことがない」という『非戦』の重みを、もっと自覚し強調していいと思います。紛争地での難民支援や武装解除などを担う活動をしてきた人たちが一致して言うことは「中立」の大切さであり、集団的自衛権の行使で米国と一体化することで、活動の地にいる日本人の危険性が高まるのではないかと、ということです。また、武器を使用することになれば当然、相手側の戦闘員だけでなく民間人を殺す可能性があることも指摘します。

このように、安保法制をめぐるは大いに議論すべきことがあり、国民から多くの疑問が示されているにもかかわらず政府が一向に目もくれず、法案を通しさえすればよしとするのは、選挙で多数を押さえていることからくるおごりではないのでしょうか。それが露呈したのが、6月25日に開かれた自民党議員による勉強会「文化芸術懇話会」に出席した人たちの発言です。新聞社などが出席者らに確認したとして報じた発言の中身は次のようなものです。

いわく「マスコミを懲らしめるには広告収入がなくなるのが一番。日本を過つ企業に広告料を払うなんてとんでもないと、経団連などに働きかけてほしい」。いわく「青年会議所理事長の時、委員会をつくってマスコミをたたいた。テレビのスポンサーにならないのが一番こたえることがわかった」。あげくに、講師として招かれた作家・百田尚樹氏が「沖縄の二つの新聞社はつぶさないとかかん」と発言しました。同氏は安倍首相と親しく、2013年11月から今年2月までNHK経営委員に選ばれていた人です。

党の代表として責任を問われた首相は「私的な勉強会で自由闊達な議論がある。自由な議論は民主主義の根幹」とかわしていました。さすがに自民党はその後、懇話会代表を更迭するなど事態の収束を急ぐ措置を取りましたが、異論を封じようとする考え方に真剣な反省がなされたのか。懇話会出席者のその後の言動を見ると、あやしいものです。

参考までに、思想家の内田樹氏の言葉を紹介します。「言論の自由とは、言論が行き交う場に対する敬意のこと。自由に議論する場が確保されていれば、長期的、集団的にはどの意見が適切だったかの判定が下るだろうという、人間の集団的英知に対する信頼が『言論の自由』です」（7月8日の朝日新聞夕刊1面）。内田氏はさらに、言論の自由の唯一の条件は、黙れと言ってはいけないうこと、と言っています。メディアに対して「つぶれる」とか「黙れ」という人の発言を、言論の自由だからと認めたら、言論の自由はいずれなくなってしまふ、ということです。

言論の自由については、1776年7月の米国独立宣言を起草したトーマス・ジェファーソン（第3代大統領）の「新聞なき政府か、政府なき新聞か、いずれをとるかと問われたら、ためらわず後者をとる」という言葉が有名です。彼は「何も読まない者は新聞しか読まない者より賢い」と述べるほど新聞嫌いだったそうですが、それでも権力を監視するマスコミの必要性を強調したのです。そして、この考え方が米国のジャーナリズム重視の基調となってきました。

こういう言葉もあります。「権力者にとっては、メ

日本の支援者の皆さま、ありがとう！

日本の支援者の皆さま、ありがとう！ 心から感謝します。おかげさまで、この1年間、延べ147名の生徒が学校へ通うことができました。それぞれの学校の校長先生から領収書をいただいています。

所在地・学校名 支援できた生徒数

●エルサレム	
聖タルクマンハス学院	21
聖ジョージ学院	7
アルフォルサン スクール	3
エクセレンス ハイスクール	1
イブラヒム カレッジ	1
エルサレム ハイスクール	2
聖ディミトリオス スクール	8
ロザリーシスターズ スクール	4
テラ・サンクタ学院	11
●ベツレヘム	
エルサレム スクール	2
聖エフレム スクール	8
ダル・アル・カリマ スクール	15
シラ養護スクール	8
●ラマッラー	
アラブ福音スクール	1
●バイト・サフル	
善き羊飼いスクール	11
●バイト・ジャラ	
ラテン大司教区付属学校	6
●里子	延べ 38
聖ヨゼフ学院	8
聖タルクマンハス学院	1
エフェタ視聴覚障害者スクール	11
テラ・サンクタ学院	4
シラ養護スクール	2
アル・リカ幼稚園	2
シュミット学院	2
聖ジョージ学院	2
聖ビンセント・ポール幼稚園	2
ロザリーシスターズ スクール	2
ラテン大司教区付属学校	1
アル・サナファー幼稚園	1
合計	147

ディアの人間というのはシラミみたいなもの。しょっちゅう、あっちこっちくちくちく刺して、頭をかきむしりたくなるような、そういうやつ」。ジャーナリストの立花隆氏が、ウォーターゲート事件のスクープで有名な米ワシントン・ポスト紙の編集主幹だった故ブラッドリー氏から聞いたものです。要するに、ジャーナリストと権力の内部にいる人間の関係は、そういうものでなければならないという意見です。権力というのは暴走しやすく、腐敗しやすいから、チェックしなくてはならない。それを、権力にある側が「都合の悪いことを書くやつはつぶせ」と言い出すと危険なのです。

政治権力が、気に食わない芸術を「退廃的」などといって排撃し、意に沿う芸術家の表現力を権威の宣伝に利用したのが旧ソ連のスターリニズムやヒトラーのナチズムの手法でした。自民党国会議員らの問題発言が噴出した会の名前が「文化芸術懇話会」だということは、何やら意味深長な気がします。

作家で僧侶の瀬戸内寂聴さんなどが、安保関連法案がごり押しで成立させられようとしている事態を受けて、「このままだと第二次世界大戦と同じようにひどい目に遭う」と発言しています。「戦争だなんて、大袈裟な」という声も聞こえてきますが、寂聴さんたちが心配するのは、「あの時代」の空気を知る人として、同じような空気を感じるからでしょう。権力にある側が、気に食わない意見を「つぶせ」と平気で言う、また、言ってもかまわないという空気。そういえば「韓国人は死ぬ」などと、常人ならとても口にできないヘイトスピーチを叫んでデモをする人たちには、「自分らは与党」との意識があるようです。

そのような空気を放っておくと、ささやかな活動をしている当NPOでさえも、政権に批判的な記事を「オリーブの木」に載せていたら「こんなNPOはつぶせ」となり、資金を断つために「ホームページなどは削除させる」ということになりかねません。

2015年度 総会のご報告

当法人の総会が去る6月14日15時～17時に行われ、2014年度の事業報告書及び収支決算書、2015年度の事業計画書と予算書、定款の改正、役員のご改選について承認されました。

※定款の改正について現在都庁に承認を申請中です。詳細は追ってご報告いたします。

2014年度 収支計算書 (累計/予算対比)

2014年4月1日から2015年3月31日まで

(単位:円)

科 目	実 績(a)	年間予算(b)	(a)/(b)%
I 収入の部			
1 受取会費			
入会金	0	15,000	
年会費	200,000	280,000	
小計	200,000	295,000	67.8
2 受取寄付金			
聖地のこどもを支える会への寄付金	7,687,608	8,000,000	96.1
青少年国際交流事業への寄付金	1,505,521	1,500,000	100.4
READYFOR関連の寄付金	1,631,856		
現地寄付金	65,539	60,000	109.2
資産受贈益	43,200		
小計	10,933,724	9,560,000	114.4
3 国際交流事業への助成金(JP2世財団)	654,464	720,000	90.9
4 国際交流事業のイベント収入	566,399	500,000	113.3
5 国際交流事業への参加費収入			
「14平和の架け橋プロジェクト」	482,500	820,000	58.8
「15平和を願う対話の旅」	2,966,405	3,700,000	80.2
小計	3,448,905	4,520,000	76.3
6 雑収入	39,065	30,000	130.2
収入合計	15,842,557	15,625,000	101.4
II 支出の部			
1 事業費			
(1)教育支援事業費	2,556,000	2,500,000	102.2
(2)青少年国際交流事業費			
「14平和の架け橋プロジェクト」	3,676,019	4,300,000	85.5
「15平和を願う対話の旅」	3,230,542	3,700,000	87.3
小計	6,906,561	8,000,000	86.3
(3)普及啓発事業費	1,410,575	1,300,000	108.5
(4)情報収集事業費		60,000	0.0
(5)報告会・講演会開催事業費	6,713	20,000	33.6
事業費計	10,879,849	11,880,000	91.6
2 管理費			
交通費	118,209	80,000	147.8
通信費(含宅配費)	186,397	180,000	103.6
消耗品費	333,659	110,000	303.3
会議費	16,404	20,000	82.0
広報費	297,648	200,000	148.8
渉外費	97,670	100,000	97.7
資料費	1,026	50,000	2.1
口座振替払込料金	75,980	120,000	63.3
事務所経費	765,300	690,000	110.9
給与手当	3,385,829	2,600,000	130.2
雑費・その他	99,474	100,000	99.5
READYFOR関連(支出)	137,180		
管理費計	5,514,776	4,250,000	129.8
3 予備費		100,000	0.0
支出合計	16,394,625	16,230,000	101.0
収支差額	-552,068	-605,000	
前期繰越収支差額	1,342,534	1,342,534	
次期繰越収支差額	790,466	737,534	

支援団体・支援者のお名前

聖地のこどもの教育にご支援くださった皆さんです。

2014年4月1日～2015年3月31日（敬称略 匿名希望の方のお名前は省かせていただきました。）

支援団体

イエスのカリタス修道女会 井荻第二修道院

医療法人 かどもと眼科

宇部・小野田キリスト教会連合

栄光学園 愛の運動委員会

NPO国際協力NGOセンター

援助修道会 管区本部

援助修道会 修練院

援助修道会 六甲修道院

大阪聖ヨゼフ宣教修道女会

幼き聖マリア修道会

オタワ愛徳修道女会

お告げのフランシスコ姉妹会 ナザレ修道院

お告げのフランシスコ姉妹会 生野修道院

お告げの聖母トラピスト修道院

カトリック滑石教会 主任神父

カトリック金剛教会 喫茶コーナー

カトリック金剛教会 主任神父

カトリック恵庭教会 主任神父マイレット・ジェームス

カトリック呼子教会 主任神父

カトリック鷺沼教会 古着プロジェクト

カトリック四日市教会

カトリック夙川教会 主任司祭

カトリック出津教会

カトリック松原教会 主任神父

カトリック松戸教会 コスモスの会

カトリック仁川教会

カトリック大宮教会 主任神父

カトリック田園調布教会 日吉家庭集会

カトリック姫路教会 主任神父

カトリック百合ヶ丘教会 コーヒーコーナー

カトリック百合ヶ丘教会 マリア会

カトリック片瀬教会 主任神父

カトリック北浦和教会 主任神父

カトリック本郷教会 主任神父

カトリック名瀬教会 主任神父

カトリック由比ガ浜教会 福祉委員会

株式会社レデス

カルメル修道会 聖ヨゼフ修道院

カルメル修道会 カルメル山の聖母修道院

吉祥寺教会 聖地のこどもを支える会

木村 洋行(株)

キャロットクラブ 代表井上清子

汚れなきマリアのクラレチアン宣教修道女会

ケベック・カリタス修道女会 本部修道院

厳律シトー会 天使の聖母トラピスチヌ修道院

厳律シトー会 灯台の聖母トラピスト大修道院

御受難修道女会

坂出聖マルチン病院

サレジオンシスターズ 管区本部

サンシティ聖母幼稚園

宗教法人カトリック・カルメル修道会

宗教法人カトリックイエズス会

殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

聖心の布教姉妹会 本部

聖体奉仕会

聖地産品展示係

聖ドミニコ宣教修道女会 坂出聖マルチン修道院

聖ドミニコ宣教修道女会 松山修道院

聖フランシスコ病院修道女会 姫路修道院

聖マリアの汚れなき御心のフランシスコ姉妹会

聖母の騎士会 代表 江原

聖母奉献修道会

東京カルメル会 女子修道院

十勝カルメル会修道院

ドミニコ会本部事務所

ドミニコ会聖 ヨゼフ修道院

長崎純心聖母会

日本海洋掘削株式会社

日本キリスト教団 巣鴨ときわ教会

古川カトリック教会

ベルナデッタ第一修道院

マリアの御心会

道の会

目黒サレジオ幼稚園

山口カルメル会 女子修道院

横浜雙葉小学校 母の会

レデンプトリスチン茅野修道院

レデンプトリスチン修道院

レデンプトリスチン修道院

(77団体 順不同)

支援者

Gonzalez Marquez Jose Alfredo	伊藤 勝子 稲国 安尚・政子	岡部 浩典 岡本 みどり	菊池 正子 北 達夫	小谷野 泰 近藤 節子
Harvey Paul A.S.	稲村 義信・美知子	小川 千枝子	北島 房子	栄林 ヒサ子
Kuno	井上 静子	小川 千都子	北楯 暢子	坂本 雄郎
ツゲル・アントニオ神父	井上 ちひろ	小川 泰弘	北原 豊子	相良 敦子
コーナン・ミッシェル神父	井上 千賀子	奥原 芳子	木下 新一	佐川 洋子
ラザフォード・ジョージ貴美子	井上 千代	奥村 聡	木村 副見	佐久間 景子
ノックス 和美	井上 伸之	奥脇 禎子	木村 浩之	佐久間 進
ワタヌキ ナオコ	井上 弘子	桶屋 理恵子	木村 まさこ	佐々木 郁子
相川 栄蔵	岩崎 正幸	小澤 知江子	木村 靖子	佐々木 俊之
相葉 清美・敬子	岩田 卓三	忍足 淑子	清藤 富世	佐々木 百合子
青山 博子	岩永 千代子	尾島 純子	工藤 昭子	佐々木 羊子
浅沼 誠子	岩本 憲嗣・八智子	忍見 春枝	国峰 恵子	佐渡 一邦
芦川 恵美子	上田 毅彦	小田 淳	久保 千鶴子	佐藤 和子
東 賢太郎	上野 瑤子	越知 哲夫	熊谷 麻里	佐藤 克裕
東 純子	薄井 紀子	小野 修	熊谷 マリ子	佐藤 俊彦・朝子
東 幸江	江波戸 晴夫	小野寺 久仁子	栗栖 徹	佐藤 政信・トシ
安達 智恵子	胡 美喜子	小野 弘美・佐代子	栗田 健治	佐藤 美津子
新 圭子	永廣 ひろみ	小野 有五・妙子	栗原 慶子	佐野 澄子
阿部 幸子	遠藤 香恵子	柿崎 ゆか子	栗原 健	塩原 いね子
阿部 初音	遠藤 恵美子	葛西 咲子	黒田 道子	塩谷 惇子
安部 安子	遠藤 寛子	笠島 澄子	黒滝 津哉子	島田 みち子
天田 雄次	大泉 広・照子	加地 貴美子	桑本 ともこ	島村 晶子
新井 栄一	大岡 よし江	加藤 喜代子	健軍	清水 紀代子
荒川 淑	大川 章代	加藤 恵子	小池 章子	清水 泰二・育子
有田 美江	大崎 桂子	加藤 千恵子	小出 宏子	菅野 滋子
飯島 喜久江	大澤 由紀子	金子 由佳	郷家 政男・かな江	杉浦 昌子
五十嵐 京子	太田 啓子・梶野 陽子	蕪木 直江	光藤 操	鈴木 絢子
五十嵐 洋枝	大田 孝	鎌田 英明	河野 順子	鈴木 サワエ
池永 廣美	太田 輝男・恵子	鎌田 まさ子	小久保 俊三	鈴木 志帆子
池端 千代	太田 晴子	原 桂子	小坂田 さち子	鈴木 登喜子
石井 英子	太田 恵	原科 節子	輿石 修古	鈴木 典子
日紫喜 満章	大友 幸子	川上 満富・園子	小塩 隆二・恒子	角 加代子
石黒 朝香	大西 茂雄・美恵	川口 茂	小嶋 光恵	関口 素子
石田 知子	大野 直美	川口 節子	後藤 礼子	高石 俊子
石村 唯彦	大部 優	川崎 伸明	小西 羊一・一枝	高馬 和子
石山 芳子	大森 アヤ子	川島 好枝	小林 明子	高島 友子
伊集院 正・衣恵	大八木 汜子	河田 昌世	小林 寛治・藤子	高島 文枝
泉 知子	大和田 晶子	川西 景子	小林 久美子	高杉 鈴子
一重 弥生	大和田 義郎	川村 直道	小林 千枝子	高塚 富士子
井手 雄一	岡 晶子	川本 和子	小林 美紗子	高野 千草
伊藤 多恵子	岡崎 三枝	瓦 妙子	五味 美香子	鷹嘴 達衛 神父
伊東 止女子	岡 しのぶ	神田 郁	小村 工ミ子	高橋 和子
伊藤 裕幸・みどり	岡 捷子	菊池 鈴子	小柳 栄	高橋 久子



高橋 玲子	戸澤 華江	濱口 吉右衛門	堀口 明美	山岡 慶子
高平 芳郎・たつみ	富岡 未峰	濱田 達男	本多 より子	山口 和也
高宮 泉・佳代子	富澤 由利子	濱田 秀子	本間 早苗	山口 裕子
田川 照子	富田 道代	早川 昌江	牧瀬 翠	山口 良子
田口 穰一郎・幾子	内藤 和子	林 あい	牧野 和夫	山崎 彰
武井 博・範子	中井 さつき	林 一江	馬越 由美	山田 エミ
竹川 典秀	長井 外美子	林 敏恵	真崎 晃郎	山田 千秋
武田 佳代子	長倉 禮子	林 資子	眞下 まゆみ	山田 剛・路子
竹原 芳子	中里 千代子	早田 治子	榎居 文子	山田 真理子
竹谷 純子	中里 光代	葉山 文子	榎谷 紀子	山田 康子
竹脇 美帆子	中澤 リナ	原 和枝	増満 由美子	山名 正彦
立川 教予	中嶋 寿美恵	半田 和巳	松井 瞭博・建子	山本 恵美子
伊達 由美子	中島 敏夫	兵藤 秀彰	松崎 武晴	山本 勝也
立林 久美	長田 満江	平賀 徹夫 司教	松下 眞由美	山本 幸子
建部 正秋	長坪 光	平嶋 直美	松島 千波	山本 純人
立脇 和夫	長野 楽・きみ糸	平田 敦也・達也	松原 えりか・グレイジ	尹 得漢・マリア
田中 惇子	中野 剛	平田 和美	真山 かほる	横岩 美恵子
田中 節子	中野 幸子	平田 なみ子	三井田 美恵子	横沢 文子
田中 典子 テレビア	中原 由美子	平野 ひかる	三木 信芳	吉川 英子
田中 範子	中村 季子	廣川 千代子	三島 八重子	吉川 美恵子
田中 翠	中村 ミツノ	深澤 恵子	三須 光好	吉川 八重子
田中 禮子	中本 由希子	深津 利子	水谷 とし子	吉川 陽子
田辺 知之	中山 公子	深堀 柱	水野 眞由美	吉田 恵子
谷 陽美	中山 宏・夕里亜	福井 潔	溝井 光子	吉田 純子
谷川 次子	永吉 恵子	福崎 康代	道又 賢一	吉田 とし子
谷 すみえ	難波 希和子	福島 貴和	簗島 すみれ	吉田 三代江
谷山 正恵	西田 仁枝	福瀬 <に>子	三宅 英美子	吉田 友一
田畑 孝子	西田 百合子	福田 青柳	三宅 哲子	吉田 有子
玉井 美里	西藤 幸子	福田 幸子	宮野 美智子	吉村 糸子・潔子
玉置 幾久榮	二宮 広子	藤井 啓子	三好 和枝	吉元 正子
玉木 美都江	根尾 睦子	藤岡 素子	向井 喜代美・孝志	米嶋 洋子
田村 辰美	野口 雅子	薩田 寿隆	松田 喜代子	李 アンナ
田山 里子	野坂 静子	藤田 春美	村岡 秀子	涌井 秀子
丹呉 喜美子	野田 征子	藤村 宏子	村上 和	和田 俊一
土本 志保子	野田 寛	藤本 保子	村上 則子	渡辺 千津子
土屋 道子	野村 英司	藤原 伸子	森 孝一・豊子	渡部 朋子
筒井 三喜子	野村 智美	藤原 真理子	森本 明子	渡辺 延子
手嶋 直美	乗倉 寿明	藤村 栄三郎	森谷 けい子	渡部 美佐子
寺田 京子	箱田 昌平	古垣 保幸	安川 三保子	渡辺 禮子
天明 恭子	波多野 輝栄	古本 佳世子	安田 美知子	
戸井 利子	服部 英子	古屋 敦子	宿澤 恵子	
遠山 満 神父	服部 夕紀	古屋 恵子	山内 亨子	
得田 照	英 隆一朗 神父	古谷 廣志・和子	山内 春治	
徳能 建創	浜岡 ミエ子	細工藤 真理	山内 雄策	

(434名 順不同)

チャリティーイベントから



▲NHK 解説委員出川展恒氏講演会。ほぼ満席の会場。



▲上原令子さんと由美子さんに花束を贈呈した花ちゃんとケイトちゃん

「平和の架け橋」プロジェクトから



▲パレスチナ人と日本人参加者。



▲50人分のピタパンサンドを総出で準備。



▲ベレグ(イスラエル)と千晴(日本)の共同作業。作業用手袋の整理。



▲雑草が伸び放題の畑、草取り前の打ち合わせ。



▲おおつちありがとうロックフェスティバルで、「中村子ども太鼓」に参加しました。



▲仮設住宅訪問。善光寺住職福島師の訪問に話が弾む。



▲遠い国から来た若者たちと、通訳を交えて交流。